



南山



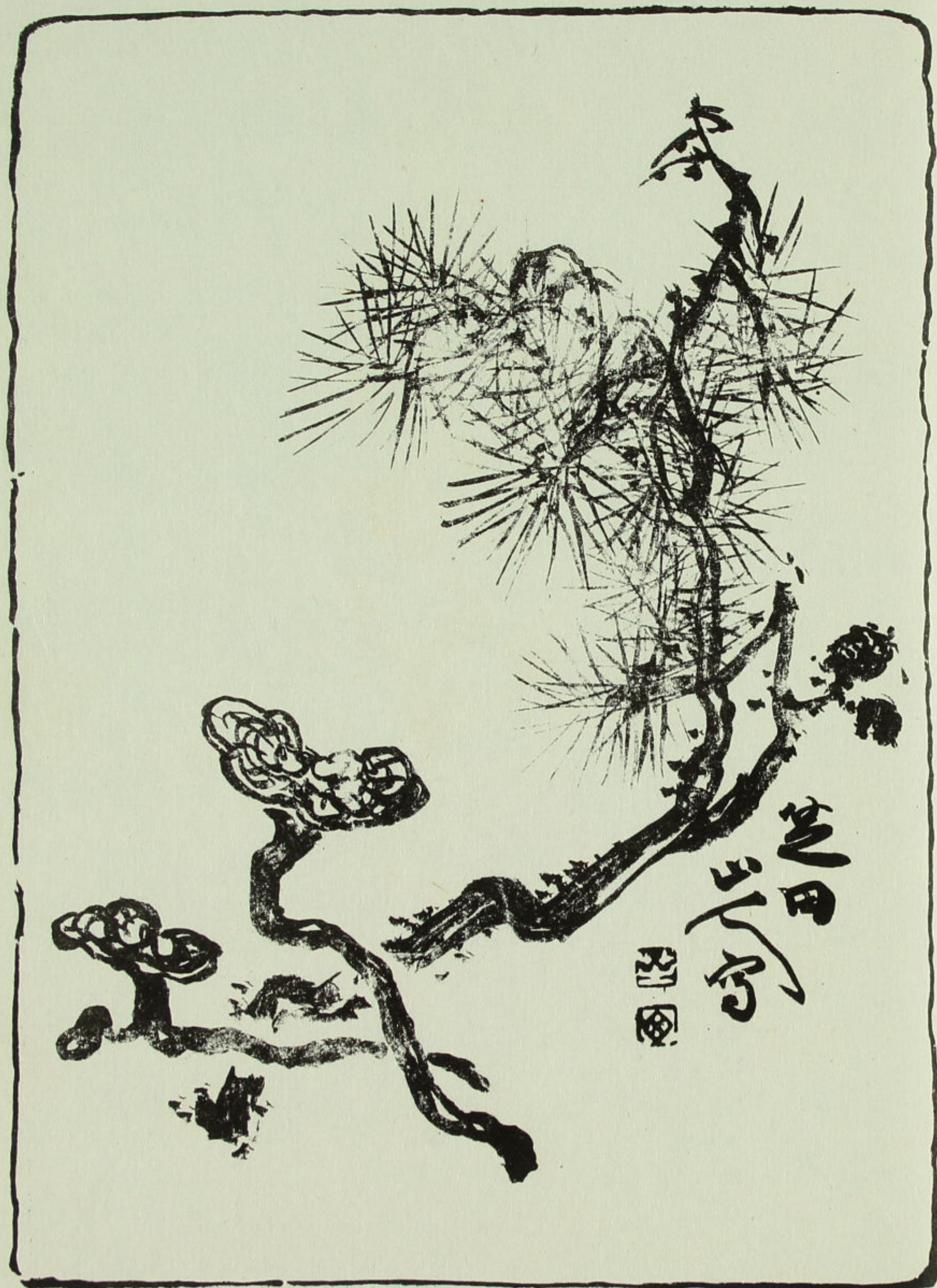
壽

志



受教以念親勤

兼書



神尾將軍
倉翁
題字

松嶺笠京氏谷孝齋治曉月菴
と號も亦政二卯歲信濃國
額訪郡平錦小口小生礼父は
松舟と云春の余暇仇句哉好と
き祭男松嶺兵孝子一七又
松舟の還曆の賀或奇濟集と
号け父の孝生氏祝福せ既初小

して位階を志し布衣林希心
老いたる教と針希老後
東京字相巻外史の門に入連陸
乃希と名あり人と教巻よ及り
小老と先達の柳の途次は教ふ
皆しく節ととも先風文せり且
亦生京の業と勉勵して印成

積可也——あはれ中後齡現尔
幸甲小いとも男無吉氏先例
小做ひ父の賀集をおもひしり
仇友凍湖系と書り諸大家の
賛助を得たり常盤集と号
け祝意成表とそ文ふしてけ子
あはれとみ子りてけ孫あはれ誠た

凡種のちりばめたりし経年も
むづのすゝの申るあれは
そあ想のまじりて始に視する
のし

大止四下り

後河本



鴨居

還曆句集

己を〜ふみおろつと花の山	松
も〜あなろふ葉 空如友	凍湖
梳きつるふ物治るふ魚の母をて	代
家にお梳きまもる如よき	兵吉
被布〜もも縫もさる月の標を夜	香露
残るあつきの夜もふるをけ	學深
梳きぬ鬼灯のまじりて	如佛
ひき〜髪う羅下るるつぎ色	芦丈

入家
 江柳
 菜明
 閑山
 湖色
 露松
 珠莊
 似水
 夢虛
 樂水

華嚴の湖不汗を而る多
 上流子又字々歌ふたう楽々
 昔云教も新しうなりふ祭

源七
 親梅紅宴の召さる、深山殿

入亭
 其水
 明哉
 壽榮
 一雪
 梅寮
 三船
 系柳
 義碧
 其盛

白鷺雲ありくくさる弥生尽
 位もくく第一地六神
 堀出くく多豊海山はけ有
 蒙古驍きも子百季うり
 子供衆のさゆき音しふ巨魁一
 冬もささしぬるきさる雨
 袖もき縁の以り、女夫衆
 道半七日をちいて、第少見

何ふさし月も秋のまろけ
 泉鏡
 竹葉のふらふら響き
 さくき
 去来は秋の道すなり
 文鏡
 学すは心と画者の流りぬ
 竹浦
 新纏と又衣あやふさしむる
 一風
 昔より継ぎ多き
 熊の皮の好み
 如海
 久き紅見し潤ふ
 花さし学
 蛸堂
 心算 子代らあつ子 稽のふらふ雲
 子交

あふおをぬす

東京

何の道すあてを登りまきせ
 初
 鶴もや美かきし花ふま
 子
 あまかしる学一ぬれ白し
 字
 身言なまきり少松の良う
 公
 とこし一ふまつ成えはる
 機
 松の花歌越てふのきり
 福
 古船やまのあつて美し
 連
 くら返すともいし
 江
 燈舟えうらあつら
 小石

よむ夕敷みそ香もしくや梅馬
子代ハ中代菊々ぬ山や美しき字
花道草のや中よ字はしく松の歌
三 一

羽前

横濱

是う羅毫路所如き厚朴の花
若小しくおとくぬ梅のあふ葉
三寸草豊たしくふくおま
伴豆
之、近す系や露珠の風光る
他石

五

甲斐

神心みぬや美やむの
とるの波岸ふおもさう知通く
あきりかおそれ得のあふ花の雲
たもしく先もさきあうとるの松
あまおつる言もらひそ葉梅のま
若わらるあ情しきほあもを
まの系ゆや中代を高く松の葉
あま地よま山をみあきむの人
あふ系や百重のうれふも
守拙
眠詠
寸雪
素山
曹施
弘道
華神
月窓
陰外

子紅の翠や一歩くふくむ杖
不求
香哉
白峰
素白

駿河

藤つゝと花を束ねの藤つと
蛸堂
香をよめつとく亭や松花
祐之
はまの葉十之やまの
卧牛
若しと衣巻と十斗
李皮

遠江

天龍の美水不夫あつと
十湖
類おひよと亭の影の月
親哉
巻くもつとあつと
夜響
春の吹を不夫妙や雪の心
夜雨

参河

梅ふくもさなわあつとあて不老の
居美
と龍のみぬや雪清しと代の春
一味
と代字とと朝松葉の園れ上
錦岳

尾張

多知多海留ととふと元々の松の
杜發

弥生月杵や壬午のわづみは
系柳
言知造す極初極の節や夫、妻
可洗

伊勢

北と免之寺し亭妻なうし松の宿
耕雨
未ぬふ若狭木しむ接木し種
蕉風
物多り初なるしし海しゆれ系
社樂
わづみ系松の節そふ初りし節
耕雪
みしもの産ふ向ふき亭杵見哉
素所
十通りれむ山終りやう夜の紐
自得

近江

七

しきそあうふ言し松れ類
高城

大阪

子代降るや哉十四れ松の花十七北史
子淵
夕景共果遊ふ言しれや小松原
子淵
若うつ子こしう何多やまの類
支仙

備後

わづみしあふまの春ち和まき長山
雪好

安藝

こゝ通しひらく卯季の唐り那
不及

冷海

以海之の松や高松ふ高松の松 鋤月

可波

花白ふ松やさしりく破みちを 雲望

花多成鐘してまれ笑ひ哉 菖宇

伊豫

趣ききさくまあ栗山の 九郎 蘭暎

線くし昇てまませしるの山 崇亭

讃岐

あらうめて趣きき松や 鹿れ雲 梅岳

筑後

八

改て子代不易と茶帰るを 榎庵

壱岐

第士見ふ松の松ふめわらよを 一峰

峰よす好まき茶さや松の夜 月溪

台南

樂あし一美うらま一喜ぶして 角士

出たふあしき破るきり花のま 茶溪

より通は成茶ありとくまを 適子

出雲

向所うら茶茶御け美れと松の松 好一

美作
尾川
是之此以故、事、冬牡丹
隆峰

加賀

賢外
招鷲
神花
外月
雪
神花
外月
雪
神花
外月
雪

默雷
秋月
子
北村
光月
一憲

越中

袋溪
振伯
北園
善
北園

此とありて元の聖も松の浦 佐波 松島

越後

龍の尾浅洗ひ傳はれも春の水 雪朗
ふもふも踏てもらひぬ大廣野 東僊
十うへり松勢もや松のわらみも 山
南山や松のこころも高をたのめ 夫江

信濃

上伊那

花傾けも松や老るるを哀れ 風像
改るるともや松のけき 長明あり 松島

+

是もつねも是所多しと柳の山 翠解
冬も松の守りも春もわらむ柳の山 黙堂
と一古の亭もやうき程は有米無 半可
久う遊し又もらもや初こふも 粟人
高も遊る松の梅やもこも 稻隣
吾もや松老を松若もも 松山
是も人れも春も春も 滴翠
十うへり此も女固生の目も 松吟
何ともうらふ代は初めれも 一首
ひもあもうとて又も不教も 一氣

考木を行人ぬ松のみしり 梨 二品
 世ももふ無事結越えり季水坂 荒山
 雪も融や縁少地と類の松 壽山
 岩も融り少り又禱祀也島衣娘 松里
 子も融り少り又子松のともし坂 清月
 十通りの雪又子松の縁少り種 不死
 此も融り少り又子松の縁少り種 智友
 若うしる葉以融り縁少り花 希世起
 以も融り少り又子松の縁少り種 希世起
 若うしる葉以融り縁少り花 希世起
 以も融り少り又子松の縁少り種 希世起

下伊那

初雪 年代新 繁此 数つと見 陽齋

松本

不尽の秋多みつれしつきの湖 竹遊
 老るりと解れ葉しる花の 翠湖

南アツ

新汲む器や松のうらもる、 井原

玉置

得るもいふあや、れきと酒 露考
 孫曾孫も集りて涼し不老門 稻穂

景振と秋はうやうな露の都
高原の露は名あり湖源一
昔か一宮曆あきら一 去 去
如海

六水内

昔松やふつと暮を注連飾り
ふ松は色噴やふゆり十帰るも
香も〜ゆやふつ夜の梅香
この松翁返りて也山笑ふ
松の花葉ふ代も咲白ひり難
まの〜れ西裡の繁え深らぬ
明月 東逸 明月

子代まで常習ふ宿を松翁を
海無返りてと此喜や々初曆
高山 琴碩

上高井

九輪をゆるる常花噴庵う那
一也り 遠き画守法より日 葉
新水聲実ある松此之祓
十返り法花や月の夜ひと返り
高士の松上尔教ありる子高
ひ〜めら経於ひ重ねて松此花
芳谷 玄司 墨河 南月 隣芽 莫祥 月丸

蓬馬や夕代の於成りく小松
 改事なうむる峰やまつの志
 かさ原水ぬや露の兼ぬる輝
 おうく一家於や其才か宿の美
 台はもるや歎れ松風颯々
 六つまし又家の禁や松水花
 新の来よ還唐の松ふ是のうけ
 之夜自ふる香をぬす花の山
 急りなると六つ十返りや松の志
 出上る葉十返りやまつ水花
 幽栖
 文丈
 山邦
 公丸
 北照
 清風
 清光
 和風
 豊年

下高井

御喜ふ仕かつて春けり 裕 升齊
 ひろまはり海なきころ松葉まきり 竹窓
 若くつ雪あやそれゆとしくを 豊月

小舟

先題の松つらめて初は虫 岷水
 や海よりこの露ふあつり 桃の酒 稻葉
 生衣島より不男あけて 梅の主 曲水

北佐久

松ヶ嶺や路照として 風光る 敦山

曼跼の新代訓添ふ五年す時
形もすの香もく聲や白し鳥
風流ふ嘉吉しる者の花
如風

再遊久

詩をいハも如のあり梅の宿
梅舎

初訪

縁近す系や年堅ふひく家
しよめり恒の白梅をく喜そ
是うの種れ喜秋也し梅の雪
わねを知る不老の術や梅の花
雪人

豊虚

石甫

雪山

雪人

上探訪

正多の訪小や鷲の湖のてめろ
わうし一系村の安やきは月
根張を各地盤をたがし三交代
船のすみ驚ふ候ふ蘇系蘇
鈴の似ぬは是れ運じや喜の松
もつ夢や又る果も見るきこ
一歩よりる歩をあらう一花の山
初唐祝ひの志の披しきり
二世のうの種無きを根しして松の花
世外
一左
耕齋
每角
樵舟
忠女
一宗
複山
岱人

十六

以よしく此春を来より紫梅の香
 如佛
 香の代を色かへて類此松
 龍口
 初花の香もやうみより香も白ふ
 如桃
 香も味あま如常の香のまじ
 其の梅
 何れも花てまゝしての香も目も花
 子芳
 還馬の香もふもやうも花も知
 東海
 香もゆりしつて路もえうて昇る梅
 希水
 仙境ふ入るも紫梅の香も花も如
 芳猶
 松の香も子代も八の代も花も如
 芳猶

物もまゝのさふ物もやう物も香
 柳水
 まぎらう一子ひらうも梅も花
 香谷

香の仰るも四代の香光や香の香
 香露
 よまも香も香もて折も花梅の花
 盛人

初香も松風も香も香も香
 超波
 まも風も梅も香も香も香
 松月

松高ふ願文も香も香も香
 一風

植うしすひと櫻めつつ柳の能
孫も来よ春雲来さそく屋藤花ふ
多物おらうしふくやと初日哉
言爲しのもるこもわくやとつ物
多梅や花の端しつとこつら
梅中錢越々冬より一ものさし
立わなると喜やつてさきふり
ひふれり葉溜てやさき散らさる
赤標花ふさし一夫の着衣娘

洞月
一枝
素人
松月
升月
竹甫
紫岬
文義
義忍
米浮

あさしやつと雲鳥の獲よんり
言らるや啼越々を日さわか
此ふえぬもの弄つて花の友
多し物雖も松ふらんや鞆の勢
雲をわくし目と眺りこくひを来
属する我はてさきしや花ふる

其盛
松廼舎
若か
一庭
休泊
まきとあ

豊年

ひしめく煙乞乞のつ施を是らり
松うねふ新れ葉ふるさるる哉

大哉
湖赤
水音

六十一 祝ふさきや くらこも 西山

三川

此き記のゆゑや花のふりて坂 菜明
人の心廣くてえぬや梅れを 梅寮
若うつふ新のぬふれ 初の日出 之朝
弥ふくは松葉やきし 子も 梨 の丸
白波き花と雲をて 春の海 月聲
あうくは松のひらや 初の日 珠亭
あうきまを 花と葉のや松の 春静
層と舞ふもや 赤より 雲の 糸柳

十七

やうつむのふ 吹雪を 雲の風 知左
吹雪を 元名包や しのさ 娘 三子代 春采
三子年の 祝ひも ぬれは 可遊
世ふ古りし 松を 言さ 夫の 春 晴嵐
初ふや 雲井の 祝ふ 新の 素竹
月を 雲を 言さ 此の 子文
原
吹雪くさぬ 松の 泉 殘
子代 祝ふ 松の 春の 縁 一雪
とく 言さ 夜の 襦袢や 松の 竹 笠

又侍立りし新屏風や鷹の巻 一梅

本郷

是より雄を松より如く六才の姿 壽榮

又鳥の候々ハ重 古事やもくはらぬ 昇山

落合

古今たよはひもふかたし聚善のこころ 雲舟

香海

ふくくといふ三夜も睡ませ松の巻 明哉

宮川

何所まで雲龍をきこくを松巻の山 樂水

吟懐や鶴の巻似る岩の品布 其水

松の巻も木こころの源一巻の中 美山

も多風や平野の所くつ松の色 光風

花の巻も子もてうつゝ鶴のわら 風葉

鳥の巻も子もてうつゝ松の似る 梅立

所も巻も子もてうつゝ松の似る 似水

中河

亦も巻も子もてうつゝ松の似る 依山

若も巻も子もてうつゝ松の似る 雨室

系も巻も子もてうつゝ松の似る 雪殘

秘めして名 初夢の玉赤き梨 一哉
若かりし家人のゆゑしき梅をぬ 一求
白梅は花を人無難 清き亭 下六 素顔
芳き木も実つさきりぬ 菊梅冬 右衛門
梅の実れ玉舟の便 閑き舟 兵衛

湖南

亭所の松や 氣さくく立きぬ 閑山
峰はまろや 月雪花に 露 露峯
祝はふ葉ふりつぬまの 花 朝光
おこししと葉をまぬ 花の百香香哉 真華

十六

年々や高嶺の松の美しき人 雀人
十遊の松よ初夢の松の美しき 珠莊

雪を回

花さきや松の香とさか 美しき 湖邊
よみ水や清きぬ流きつぬ 美しき 露松
亭さきや松一階の美しき 美しき 暮月

漆

木さきや湖水の上と成る鳥 西落

川岸

遠慮のありしぬ初夢の 浦

あけ伸るきぬしもうほや春の山 龍骨
舞鶴の聲もあふなり 松の嶺 梅溪

平野

春風や扇ふ子紅なるす梅鼓 石翁
露宿子花の多岸浅草あふり 入家
さう波ふ松先清め事 松の夜 入亭
ひもやきふして又あふるひも我 北湖
あふ知よまふ事ふらうとまの醉 都人
何れ舞臺めて是くしものうま世 風月
あんのうとあきぬ梅の笑入る 素景

そめくぬ 松のそめくぬや 代よ移つ 千丈
あふしきう 舞入るしあふも 花の山 又出なぬしひもあふ 竹菴
昔あふ 舞の息あ 花のそ 一其
又舞あ 舞の美さよ 楊のしり 真川
去生 浅家の水色や 梅のま 竹露
何変までも 春の舞け 梅柳 古仙
菫のぬきぬ 舞のむら 江柳 初

追加

神奈川

松の嶺 杉まきまきとらせ 雪の色 海山

香あつらや枝ふりもよき冬の梅 上野 閑窓
 多路〜空もむあけ梅り難 甲斐 眠石
 初めりよき梅ははてはめ 京都 九岳
 床の向き松竹梅の季始哉 大阪 月人
 松き〜なるあて是る不初りの出 出雲 友川
 下子姑ふむきき廣き小春果以、 園塚

ふり葉の事字 祝言残〜々 翠潭
 山越て住よき 里や梅の 代

鬼。渡る路ぬらむといふ先哲の吟よきて

海山遊一印〜〜祝ひよき 凍湖

雪玉の空吟雪鳥の光景照らす

月雪や花あゆ〜〜酒の味 松嶺

詩家の祝章を〜〜

季玉此言を〜〜数ひ〜〜 雑 男 兵六

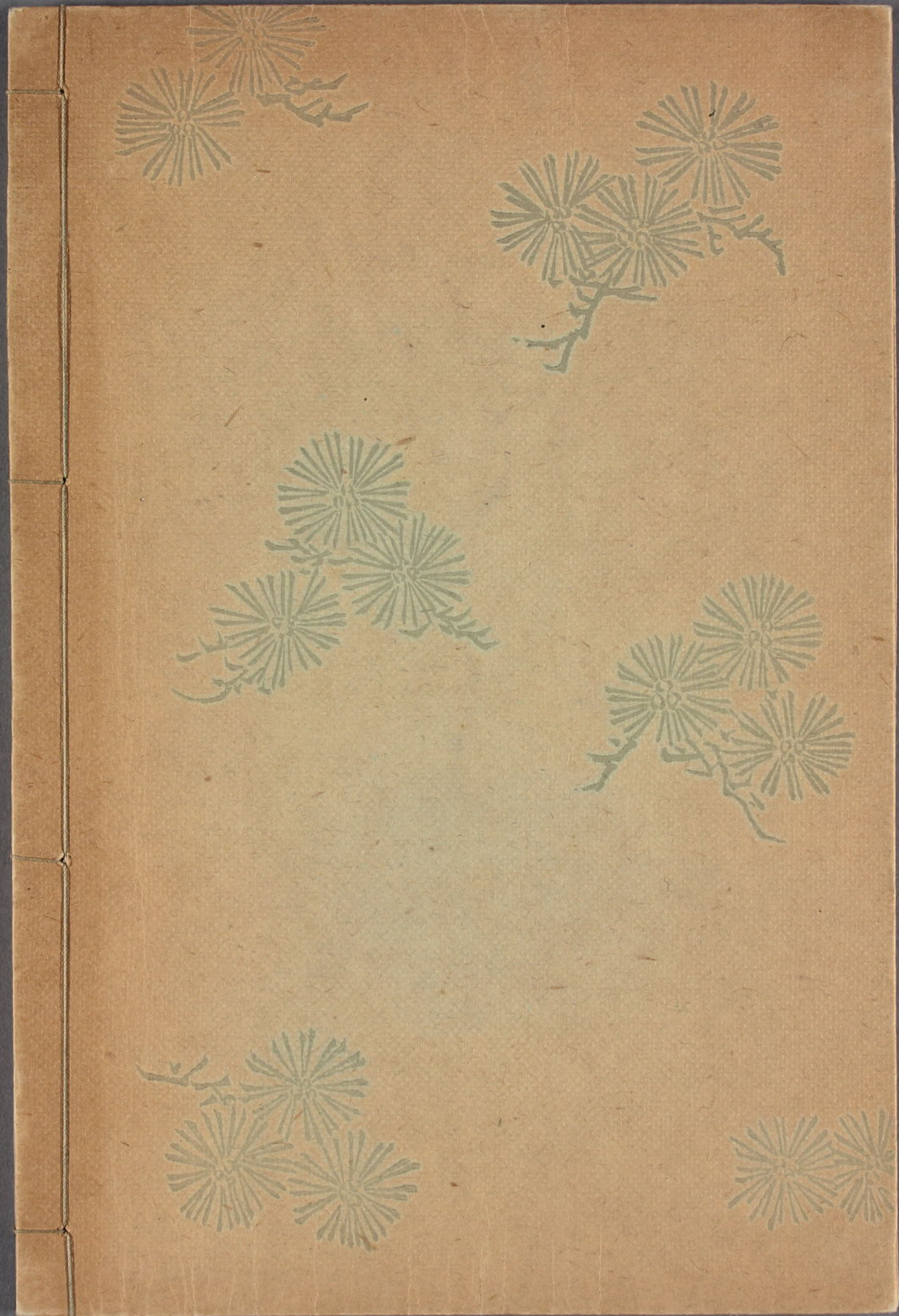
大正四乙卯夏六辰

自然書(五)

長野縣諏訪郡平野村山口

文房可

笠原松嶺
曉月菴



賀正

喜母は笑覧をこころ

とくははれやわすつきの初日のふ
字の友や丸心くまふまらつ舞
掃初や毫意用意の字世市
羽子板や似顔の押懸競一ふふ
あふふふふふふ

此題

喜まうの羅おむ初のや富士の山

松島

少坪